

2024年11月17日 説教「深みに漕ぎ出して」

ルカの福音書5章1～11節

ルカの福音書の学びですが、イエス・キリストの宣教の始めの時期にもどり、5章からみていきましょう。

1. 群衆に舟から語られたイエス (1～3節)

①ゲネサレ湖の岸边 (1) 「群衆がイエスに押し迫るようにして神のことは聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、」

場所はゲネサレ湖。ガリラヤ湖のことです。長さ20キロ、幅13キロの広さで淡水湖でした。ヨルダン川南の死海に魚がいなかったのと対照的です。その岸边でイエス・キリストは群衆に神のことは語っておられたのです。押し迫るようにして人々が集まるほどに、イエスは人気があったのです。

②網を洗う漁師たち (2) 「岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。」

そのままでは、危険を察知していましたが、岸边に二そうの小さな舟に注目して、それに乗って語ることを思い立たれました。一方、その小舟を所有していた、漁師たちは早朝からの漁を終えて、舟から降りて網を洗っていました。投網の漁に用いた網でした。その網を洗う作業は、漁師たちにとっては、次の漁のための重要な備えでした。

③舟から語るイエス (3) 「イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。」

その小舟の一そうはシモンという人が所有していました。このシモンとは、その後イエスの代表的な弟子となるペテロのことです。さて、その舟に乗りこまれたイエスは、シモンに陸から少し離れた所に漕ぎ出すように頼まれました。群衆に話すには、いささか距離を取ったほうが、語りやすかったと思われる。そこで、小舟の上から陸地にいる群衆に教え始められたのです。

2. 大漁に驚かされるペテロたち (4～7節)

①深みて魚をとりなさい (4) 「話が終わると、シモンに、『深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい』と言われた。」

多くの人々が聞いた話は終わりました。すると、イエスはシモンにとんでもないことを言われました。『深みに漕ぎ出して、網をおろして魚を取りなさい』。神の国に関わる勧めであればともかく、自分たちの専門領域である漁について勧めですから反発心もわきます。「そのことについては、私たちにも知識も経験があります」と言いそうになったでしょう。

②おことば通り (5～6) 「するとシモンが答えて言った。『先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばおり、網をおろしてみましよう。』そして、そのとおりにすると、たくさん魚が入り、網は破れそうになった。」

しかし、彼なりに最大限のへりくだりをもって言いました。「先生。私達は夜通し働いたのです。それには大変な苦勞もありました。しかし、一匹もとれ

なかったのです」。こう言った後、彼は信仰心を取り戻して言いました。『でも、お言葉通りに沖に行って網をおろしてみます』。そして、実行してみました。すると、何ということでしょう。網が破れそうになるほどたくさんの魚がかかったのです。舟が沖に出るのに、イエスも同行されたようです。

③魚で一杯になった舟 (7) 「**そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい上げたところ、二そうとも沈みそうになった。**」

シモンは自分達だけではどうにもならないと見て、並走していた舟の仲間たちに手を振り、大声をあげて呼び出しました。そして、自分達の舟と仲間の舟に魚を入れはじめました。しかし、いくらとっても終わらないほどに魚の数は多く、ついにその重さで二そうとも沈みそうになりました。

3. 漁師たちへの招き (8~11 節)

①足もとにひれ伏し (8) 「**これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから』と言った。**」

この出来事の一部始終を体験したシモン・ペテロは、ただイエスの足許にひれ伏しました。これは舟の上です。魚が一杯の舟の限られた部分に体を折り曲げたのです。そして言いました。『主よ。私から離れてください』。これは、恐れ多くて近づいてはならないと思ったことから出た言葉です。さらに、『私は罪深い人間ですから』。罪というのは、神をないがしろにすることです。彼はイエスを侮ったことを悔いたのです。

②人間をとる漁師に (9~10) 「**それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなのも、ひどく驚いたからである。シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。『こわがらなくても良い。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。』**」

大漁という出来事にそこにいた者たちは非常に驚きました。朝には全く不漁であったのだから、改めて出漁したところで獲れるはずがないと思っていたのです。そこには、漁師たちの一団をまとめるゼベダイの子であるヤコブとヨハネもいました。イエスは彼らにいわれたのです。『こわがらなくても良い。これから後、あなたがたは人間をとる漁師になるのです』。イエスはこの出来事を計画されていたのでしょうか。つまり、魚をとること、真の主は神であることを教えつつ、その主が今度は彼らに人をとる漁師になるよう促しておられるのです。

③従った漁師たち (11) 「**彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。**」

ペテロをはじめとして、ヤコブもヨハネも、舟を陸に着けたときに、何もかも捨て、イエス・キリストに従っていったのです。

《結論》 今朝もこの聖書箇所から、三つのことを学びましょう。

第一に、「従う」ということについてです。ここで、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人はキリストに従っています。彼らはキリストの弟子となったのです。完全に漁業をやめたわけではありません。前回、ルカ 18 章において裕福な役人に関わる記事のなかで、「神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者で…永遠の命を受けないものはありません。」(29, 30 節)という下りがありました。これについては、キリスト教は家族を大切にしないのかという誤解をする向きがありますが、そうではありません。十戒の第五戒に「あなたの父と母を敬え」とあるように、家族は大切なのです。しかし、十戒では一戒から四戒までは、創造主をまず崇め、その関係を大切にすることでした。イエス・キリストは、人間にとっての源は人間ではなく、神であることを伝えているのです。そして、家族をも捨てる気持ちで、神であるキリストに従うことを教えておられるのです。そこにこそ、人間にとっての、救いと平安と喜びがあるからです。

第二に、第一の学びとも関係しますが、シモン・ペテロの信仰についてです。彼は漁師ですから、漁について、イエスから命ぜられることはあまりうれしいことではなかったでしょう。まして、すでに早朝から働いて不漁でしたから出ても無駄だという考えがもたげてきたでしょう。しかし、彼は「しかし、おことは通り、網をおろしてみましよう。」と告白しました。ここで思い出すのは、イエスの母マリヤのことです。御使いガブリエルがナザレのマリヤに臨んで御告げをされた時のことです。「あなたはみごもって男の子を生みます」と言われ、さらに、「聖霊がおおいそれを実現する。神にとって不可能なことはありません」と言われたときに、マリヤは「私は主のはしためです。お言葉通りこの身になりますように」と告白しました。つまり、人間的には受け入れがたくても、ペテロもマリヤも「主のおことばだから」と、主のお約束を信じ受け入れて従っていったのです。

第三に、「深みに漕ぎ出して」とある点です。それは文字通り、沖に出ていくということですが。「あなたがたは行って、すべての国民を弟子としなさい」(マタイ 28:19)に通じます。踏み出すことが大切なのです。主を信じて、漕ぎ出すことによってことが起こされるということです。また、深みに漕ぎ出すことは、ペテロにとっては、常識を越えていましたが、なすべきことでした。そこには思いもかけない大漁が待っていました。それは、彼らがその後「人間をとる漁師」になっていくために、覚えていかなければならないことでした。人間という存在を漁ることには、主なる神からの知恵をいただいていくことが不可欠なのです。

私達の歩みには、先が見えないことがあるでしょう。また、高い壁が立ちふさがっているようなことがあります。この聖書記事ある促しがあっても、従えない、踏み出せないと思われる方もありましよう。しかし、思いもかけない大漁は、主の御手のなかにあるのです。主を信じて踏み出していきましょう。私達の教会にとっても同じでありましよう。ともに、主のすばらしい恵みに浴するためにも、キリストに従っていきましょう。神の恵みに浴するためにも、自分達の考えを第一にするのではなく、主におたずねをして、みことばをいただきながら、踏み出していきましょう。